

KEY-WORD



No. **16** NOVEMBER

スペシャリストが考える

理想の住宅

中村雅子

中村雅子デザイン事務所



写真①：キッチンとリビングを一間続きに、限られた面積を有効利用。採光にも配慮している。(Photo.安西英一)



写真② (Photo.安西英一)

女として、妻、母親、一社会人として

女性が結婚をし、子どもを産み育てると母親業に専念する傾向が多く見られます。しかし個人的には、女性も一人の人間としての生き方を大切にしていただきたいと思っています。さらに、それは住宅を設計する上で、私が細かく配慮をする要素の一つにもなっています。

日々の暮らしの中で、妻が夫に着替え姿を見せないウォークインクローゼットの設置や、それがスリッパに困難でも十分に身支度の可能な脱衣室、そして少し大きな二面の鏡や、快適にメーキャップも可能な空間。そういう独りの時間をとりわけ妻であり女性である少し秘めた部分を残すような配慮が、住宅の中には必要だと思ふのです。



なかむら・まさこ / 1960年東京都生まれ。
フェリス女学院、桑沢デザイン研究所卒業。
1984年 Casappo & Associates、1985年中村雅子デザイン事務所設立。1994年12月スペイン・バルセロナ アトリエ開設と同時に移住。商業施設から住宅まで幅広く設計。独立した5年を経て、さらなる5年間、ヨーロッパでの活動を計画中。中村雅子デザイン事務所代表。

よく私は外で、独りで食事している女性を見かけますが、食後、見知らぬ他人の前でバッグからおむろに口紅やらを取り出し手元鏡でルージュをひく……。そんな行為を目にすると、同じ女性の私でも恥ずかしい気がします。

こうした一人の人間としての品、マナーは、女性であるからこそ大切にしたい部分ですが、これも住宅(住まい)のつくり左右される要素が大きいと思われまふ。そうした自覚や矜持も、社会との関わりの中だけでなく、家族の中でも一人の人間として、きちんと独立して初めて持てるものだからです。そのため、環境を整える配慮をしてこそ、良い住宅といえるかも知れません。

都市型住宅の設計について

よく私どもの設計事務所に、これで家を建ててくださいと、必要な部屋数といくつかのスペック(サウナ、床暖房、食器洗い機、etc)のメモをお持ちになって、これで設計作業が進められると考えている方が幾人かおられます。しかし、本当に大切なことはもつと別の部分なのです。それは、その方が、どうい



写真③：中庭テラス。植え込みを巧みに使って、隣家が近接しているを感じさせない。表通りからも遮られている

生き方をしたいか” “どう暮らしたいか” という、いわばその方が望む住宅の、ソフトウエア的な空気・雰囲気です。作り手は、そこを最も知りたいのです。

実際、都市型住宅の依頼がいちばん多いのですが、その多くは二世帯ないし三世帯住宅か、親族のいる既存主屋に隣接して設けられる新築住宅か、二十〜三十坪程度のコンパクトな土地に家族四人で暮らすという、周りとの関係（近接も含めて）が密接なつながりをもつ家です。その一軒を設計する際にも、町並みの一つとしてのバランスはどうか？具体的にアプローチは別か？既存住宅とのつながりはどうか？、また外壁が門の役目を果たす場合、その道路に面する窓を通しての、この家の雰囲気はどう醸し出すか？……等々、実に多くの課題を検討していく作業が欠かせません。こうした課題の決定も、最終的には施主像、近隣像、町並みなどのソフト的な部分に左右されることが多いのです。その解答によって家の良し悪しが決定されるといっても過言ではないですから、私どもはここにいちばん時間をかけます。

家が人を作る。人が家を作る

欧米（最近では日本でも）ではしばしば、家に人を招くということは「あなたをフレンドリーな相手だと思つています」ということの意思表示とされます。そういう意味でも、住宅はその住んでいる人をよく表すプライベートルームな部分であり、ひいては個人の精神の源、安らぎの場所＝家庭そのものだと考えます。

建築家が住宅を設計する際に、気をつけなければいけないことは、造り過ぎないことだと思えます。そのやり過ぎない、できれば十のうち六〜七くらいで止めておいて、あとは施主によって話を伺いながら決めていく

か、住み手にゆだねるか、その見極めが住宅の設計の難しいところでしょう。いずれにしても建築そのものは、できるだけ、合理的で簡潔でしかも美しい平面・断面計画であり、構造・設備であるべきだし、素材も可能な限り単一にとどめ、住み手と同様の経年変化をするものがよいと思えます。

チークの床が経つにつれ餡色になっていくように、しつこいが少しづつ黄味をおびていくように、徐々に徐々に住み手と住宅とが一体となつていくような、そしてその年月を育てられるような住宅でありたいと思えます。

また私はよくエスキースの段階で、楽しさの仕掛けを考えます。それは、「わんぱく坊主のいるこの家では子ども部屋を中心に、一筆書きプランのように玄関〜内階段〜子ども部屋〜外階段〜中庭テラスと、ぐるっと回っていくその道中を」（写真③）またあるときは、「女の子二人が、少しばかり広い階段に並んで立つて、その前の白い大きなカベにプロジェクターを通して家族の写真をみて、その両親は少し引いたところで木のテーブルに向かっている……」（写真①②）なんて。また、「この暖炉は脇の間半の大きな窓ガラスにその灯が映され、鏡になるな……。少しエロチックだな」とか。まあ、こんなところが、設計図面の中に私たちが書き込みたい「住宅の楽しさ」だと思えます。もちろんこうした「住まい像」は、施主と私が互いの理想や希望を根気よくキャッチボールする中で、ようやく一つの雰囲気として描き出されてくる微妙なものです。そうした営みから紡ぎだされ、住まいに込められた「暮らし方」こそが、住む人の個性を作っていくのです。家が人を作り、その人がまた自分の暮らしに合った家を作っていく。そんな人と家が互いを作り合い、高め合っている住まいこそが、理想の住宅だと思います。